2018 年　1 月 1 日発行

点訳通信

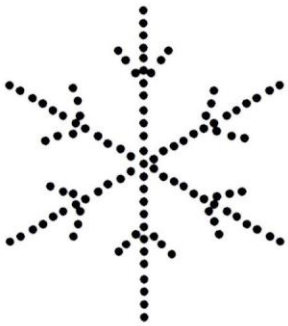
95 号

日本ライトハウス情報文化センター
点字製作係
発行責任者　竹下　亘
〒550-0002　大阪市西区江戸堀 1-13-2-8F
TEL 06-6441-1028（点字製作係直通）

最近、指先が乾燥し、荒れやすく、これでは点字の触読にも日ごろの生活にも支障を来すので、いろいろとケアをしています。ハンドクリームをぬってみたり、マッサージをしてみたり…。指先に潤いを保ち、乾燥しやすい冬を乗り切りたいというのが新年早々の私の抱負です。

２０１８年も更にパワーアップした点字図書づくりに励んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（点字製作係　奥野真里（おくのまり））



【 休館・開室のお知らせ 】

１２月２７日（水）　年内ボランティア活動最終日

２０１８年

１月　６日（土）　ボランティア活動開始

３月　８日（木）　休館（ボランティア交流会にご参加ください）

３月２１日（水）　休館（春分の日）

２０１７年度・第３０回専門点訳講習会「教科書・教材点訳コース」を開催しました

毎年、「毎日新聞大阪社会事業団」と共催でおこなっている専門点訳講習会が、今年で３０回目という節目の年を迎えました。本講習会が始まるきっかけとなったのは、地域の学校で学ぶ（インクルーシブ教育を受ける）視覚障害のお子さんのための教科書点訳支援です。そこで、これまでの講習会の歩みを振り返るとともに、今後、期待される専門点訳について問い直しました。

講習会は７月１４日から９月１５日の間に９日間行い、初日は概論として、当館の竹下（たけした）亘（わたる）館長が、これまでの専門点訳講習会の歩みについて講義を行い、それを受けて、２人の学生当事者から、いかに点字を活用しているかを事例発表していただきました。

２日目以降は国語、算数/数学、英語、社会、理科、その他（書写、音楽、図工など）の各科目に分かれて、どのような点に留意し、工夫をこらしながら教科書点訳を行っていけばよいかという講義を行いました。概論は全員必須でしたが、各科目は選択制で、関心のある科目を受講していただきました。

現場の熱気が伝わる概論に

竹下館長の講演では、教科書点訳の歴史とともに、昭和初期の教科書の資料の実物も用意され、これまでの歴史の一端に触れることができました。

次に、京都産業大学大学院生の寺西修二（てらにししゅうじ）さんの講話があり、ご本人の実体験を豊富に語っていただきました。点字に出会う前と後での心の変化や、点字習得の動機、日頃の点字利用についてもお話しいただきました。特に、点字を自分の文字として獲得しようと思った時のきっかけは、「墨字を読むより、点字を読む方が楽で楽しい」と感じたことだというエピソードや、原本に書かれている図や写真を、ただ単に「省略」と書かれるのはとても残念だ、何か一言でも補足説明があると嬉しいというお話は、参加者の心に響きました。教科書だけでなく、日頃の点訳にも大いに参考になる内容でした。

続いて、関西学院大学大学院で学ぶ、山岸蒼太（やまぎしそうた）さんは、小学校から大学まで、目の

見えるお子さんといっしょに学んだご自身の経験を基に、学校やボランティアグループとのつながりを通して感じていたことをお話しいただきました。そして、現在の研究テーマでもある、視覚障害者が点字を利用する環境が変化してきていることや、点字教科書が保障されるまでの動き、それを支える点訳ボランティアの役割と問題について伺いました。ご自身の率直な考えを述べられた熱意のこもった発表で、参加者は皆、真剣な面持ちで聞き入っていました。

この３０年の間に、手打ちからパソコン点訳に移行し、点訳環境はかなり変わりましたが、求められている支援内容はそれほど変わっていないのではないでしょうか。目の見える人とともに学び、情報を共有していくということは、伝え方（文字）は違っても、最終的に同じ内容を理解しなくてはなりません。情報が不足したり理解しにくいものにならないように注意し、工夫することが点訳では求められていると思います。また、この状況は、どれだけＩＴの技術が進んだとしても、これからも不変なのではないでしょうか。

以下に、講習会に参加してくださったボランティアの方の感想をご紹介します。

独りよがりの点訳にならないように

梶原（かじわら） 由美子（ゆみこ）

点訳を始めて８年余、目標は教科書を点訳すること。がんばってちゃんと点訳ができるようになれば「教科書をやってください」と声がかかるのだと思い込んでいました。

この度、専門点訳講習会で教科書・教材コースがあると知り、もちろんすぐに受講申し込み！

初日の概論でお二人の大学生からお話を伺いました。視覚障害を乗り越えて難しい研究をしておられる様子に感動しました。

その時の質問「私たちは難しい図表やグラフが出てくると、時によっては〈図は略〉としてしまいます。」に対し、「せめてどんな図があったのかだけは説明を入れておいてほしい」という答え。また、「グラフは、読み取った数値を表にしますが」と尋ねると、「可能ならばグラフも併記してほしい」とのこと。「ああ　そうなんだ！」と思

いました。独りよがりの点訳をしていることが多いのではと反省しました。

次の回から、国語、英語、算数、理科、社会、その他と続きました。低学年の教科書は、ほとんど図や写真ばかり。それをどうやって分かり易く点字で表現するのか。

詳し過ぎて何だか分からなくなるよりは、うんと単純化した方がいいし、昆虫の体の説明などは分割して説明したり、地図などは２枚にわたったものを張り合わせたり・・・といろいろな方法を教えていただきました。その話を伺ってなるほどとうなずくばかりです。

特に印象的だったのは、社会の教科書に出てくるスーパーマーケットの店内図の説明についてです。私は大きな勘違いをしていました。店内の説明だから買い物をする人のための説明をと思いました。ですからどこに何があるのか詳しく分かり易くと思い、長い文章になってしまいました。

でもこれは教科書、しかも小学生用の教科書です。どこに何があるかより、スーパーマーケットとはどんなところか、だいたいどんな配置になっているのかを内容に合わせて知らせればよかったのだと思いました。

参加者の中には、既に今、教科書点訳に取り組んでいる方もかなりおられ、いろいろ具体的な質問や疑問が出され、悩みが語られました。でもどの方も、とても一所懸命で、すばらしいと思いました。

これから私自身も実際に教科書に取りかかることになると嬉しいのですが、その時は真摯な気持ちで、独りよがりにならず、そしてできれば、たくさんの仲間と一緒にやっていきたいと思っています。

講師の先生方、ありがとうございました。

点字を学ぶ意欲と、学習環境が大切
～「教科書点訳連絡会」セミナー報告～

１１月１８日（土)、玉水記念館において、「全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会（以下、教点連)」の第２６回セミナーが開催されました。日頃から教科書点訳に携わるボランティアを始め、視覚障害児童を担当する視覚支援学校・地域の学校の教員や支援員、教育委員会の担当者など、計７７名が参加しました。

前半は二人の講師の講演があり、後半では、参加者同士の情報交換を行いました。

私たちが日頃目にする（触れる）点字を、視覚障害の子どもたちはどのように学んでいるのでしょうか。見よう見まねで習得できる墨字とは違い、実は、しっかりした点字指導や導入があってこそ、その後の読み書きの習熟がスムーズにいきます。できるだけ個々の特性や学習ペースに応じたカリキュラムや教材を用意し、子どもたちが使用文字を獲得できるよう細やかな指導が必要です。

一方、点訳ボランティアは、子どもたちの（読み物ももちろん）教科書・参考書の製作を支えていると言って過言ではありません。しかし、実際には点字を読み書きする子どもたちの現状を知らずに点訳しており、本当にそれで役立っているのかという不安に駆られることもあります。 セミナーの情報交換の時間に、ある視覚支援学校の先生が発言してくださった学校現場の取り組みや課題は、日頃なかなか実情をお聞きすることのない私たちにとって、たいへん有意義なお話であり、先生方が日々奮闘しながら教材開発をされていることを知りました。

以下に、セミナーに参加されたボランティアの方の感想をご紹介します。

点字はだれのもの？

高橋（たかはし） 世貴子（せきこ）

１１月１８日、教点連主催のセミナーに参加させていただきました。テーマは「点字学習の導入と、国語教育における点字の表現方法」で、①「点字の読み書きの導入と使用教材」（講師：牟田口（むたぐち） 辰巳（たつみ）氏）と、②「国語教育における点字表記とレイアウト」（講師：坂井（さかい） 仁美（ひとみ）氏）の講演、そして、③情報交換がありました。

当日、学校の先生・ボランティア・施設の職員等、８０人近くが参加されました。

きめ細かな資料とともに、豊富な事例が紹介されました。会場には、冬の走りの外気の冷たさが嘘のように、「伝えたい」「教わりたい」の、双方向の熱気が溢れていました。

上記の①②③に加えて、④閉会挨拶の中で、それぞれ、最も印象深く思ったことを、以下にまとめてみました。

①「点字の読み書きの導入と使用教材」

「見る」と「触れる」は大違い。触読へのアプローチには、墨字を学ぶ以上に細やかな配慮が必要であること、しかも、一人ひとりに寄り添った配慮が必要であることを、あらためて学びました。

私は点訳ボランティアですが、かつて、一般校に在籍する小学生・高校生に触読指導をしたことがあります。触読指導のノウハウを持たない私は、暗中模索・四苦八苦、未熟ながらも一生懸命でした。「改訂点字学習指導の手引」（文部省発行）に示された資料に従って指導しました。しかし、今思えば、教材の意図するところを理解せず、ただ教材を提示していただけのように思います。いわゆる、＜教科書で教える＞ではなく、＜教科書を教える＞式の指導をしていたように思います。当時の生徒さんに申し訳なく思っています。

②「国語教育における点字表記とレイアウト」

美しいレイアウトには、子どもたちも共感する。これは点訳ボランティアの私が目指すところでもあり、難しいところでもあります。一般校でたった一人の点字触読者が使用する教科書に、どこまでアレンジが許されるか・・・私には大きな課題です。

「どの子も、自分の文字・自分の言葉を持つことが大切」。先生の、生徒に対する愛の深さを感じました。

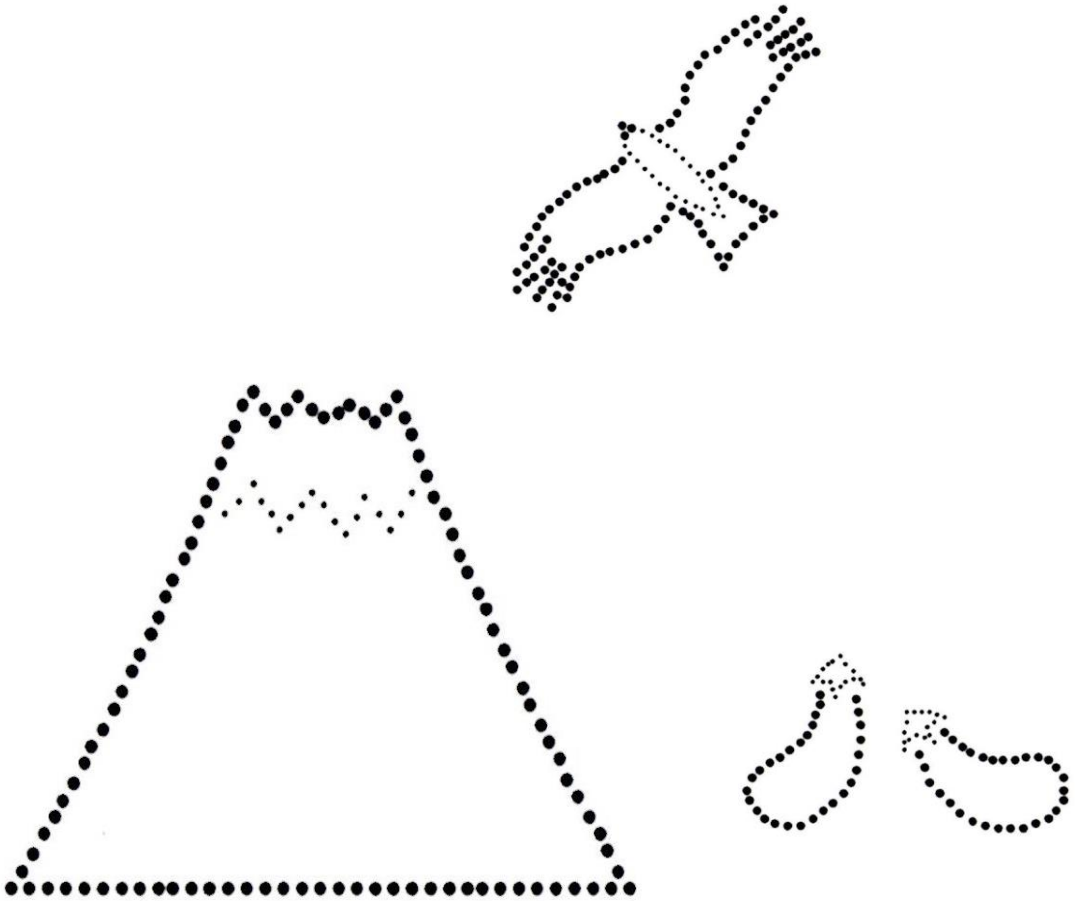
③ 情報交換

ボランティアだけでなく、視覚支援学校の先生も、大きな課題を持っておられることがわかりました。そして、「自分が読み書きできる文字を持つことが大切」のご発言が心に沁みました。その信念を支えとして、課題に向き合っておられるのだろうと思いました。

④ 閉会挨拶

「点字は墨字の通りではない。一目でわかるものではなく、触ってわかるものに編集しなければならない。誰が編集するのか？　それはボランティアの役割ではない。ボランティアがやらざるを得ないという状態は問題である」。この発言は私の琴線に触れました。心臓がパクパクしました。教点連もその意識をお持ちなんだ！点字は、まだ文字としての市民権を得ておりません。点字教科書の製作がボランティア頼みであるという現実が、その証の一つです。「点訳技術はともかく、点字教材があれば良し」の時代は過ぎ、今は質が問われる時代です。次に、ボランティアに頼らない時代の到来が待たれます。「頑張れ、教点連！」これは応援というより、私の切なる祈りです。

視覚障害者にとっての点字は、晴眼者にとっての墨字と同様、大切な文字です。点字であれ、墨字であれ、文字は基本的人権レベルの大切なものです。そのことを再認識できたセミナーでした。参加させて下さり、ありがとうございました。



蔵書の奥付に内容を追加します

蔵書データは全てサピエ図書館に登録しています。奥付に下記の内容を付記してください。

２月１日以降に入力が終了した図書から順次書いていただくようにお願いします。

点訳者名の後に、改行し、３マス目から

（「サピエ図書館」登録文書）

と書いてください。　（　）も含みます。

連 絡 事 項

＊１５人の新人ボランティアが活動開始

２０１７年度点訳ボランティア養成講習会が、１２月９日に修了しました。１月から新たに１５人の新人ボランティアが活動に加わります。　各曜日に３人ずついらっしゃいますので、よろしくお願いします。

＊新人ボランティア向けフォローアップ講習会を実施

２０１７年度点訳ボランティア養成講習会の修了生を対象にしたフォローアップ講習会を、３月３日（土）１０時から行います。

＊「点訳の手引き　第３版」の改訂について

現在使用している、「点訳の手引き　第３版」が２０１９年３月に改訂されます（予定）。原則的な規則や考え方はこれまでとほとんど同じですが、細かな規則や記号の使い方が変更になります。変更内容が確定ししだい、当センターでの対応を検討します。